

理事長による航空券（世界一周航空券）の利用状況（平成 18、19 年度）

	使用した航空券 (購入金額)	経路			用務	備考
		利用日 (出発地)	出発地	到着地		
1	航空券 A (¥1,216,319)	H18/5/20 — H18/6/19	フアンフスコ — ロンドン	成田 — フアンフスコ	機構の内部事務(沖縄) — 科学会合出席及び採用活動(ケンブリッジ大学)を主たる目的として滞在したロンドンから出張の起点(居所)への帰路(連携・採用活動(ソーク研究所))	・居所(サンディエゴ)を起点とする出張であり、パーカー(カリフォルニア大学パーカー校での会合)を経て、フアンフスコから当該航空券を利用。 ・成田→ロンドンの区間は旅程の都合上、使用せず(成田→ロンドンを個人で購入)。 ※ 結果的には、使用区間のみを個別に購入した場合の経費(試算額)よりも割安であった。 購入費: ¥1,216,319、試算額: ¥1,910,317 (内訳) フアンフスコ→成田 ¥940,239 ロンドン→フアンフスコ ¥970,078 (注: 航空券使用時の換算レートにより試算。以下の試算も同様。)
2	航空券 B (¥1,264,542)	H18/7/1 H19/2/22 H19/3/28 —	フアンフスコ 関西 シンガポール —	関西 シンガポール ロンドン —	機構の内部事務(沖縄) 連携・採用活動(A*STAR) 科学会合出席及び採用活動(ケンブリッジ大学) —	・居所(サンディエゴ)を起点とする出張であり、日本への直行便のあるフアンフスコから世界一周航空券を利用。 ・ロンドン→フアンフスコは、出張予定の変更により使用せず。使用期間は満了している。 ※ 結果的には、使用区間のみを個別に購入した場合の経費(試算額)よりも割安であった。 購入費: ¥1,264,542、試算額: ¥2,427,214 (内訳) フアンフスコ→関西 ¥960,956 関西→シンガポール ¥441,988 シンガポール→ロンドン ¥1,024,270
3	航空券 C (¥1,286,342)	H18/9/27 H19/5/24 H19/6/2	成田 ロンドン ロサンゼルス	ロンドン ロサンゼルス 成田	科学会合出席及び採用活動(ケンブリッジ大学) 連携・採用活動(ソーク研究所) 機構の内部事務(沖縄)	・機構の用務による滞在地(日本(沖縄等))を起点とする出張であり、成田から世界一周航空券を利用。
4	航空券 D (¥1,319,844)	H19/2/14 H19/6/4 H19/6/15 H19/7/1	ロサンゼルス 成田 シンガポール ロンドン	成田 シンガポール ロンドン ロサンゼルス	内閣府訪問等(東京)、機構の内部事務等(沖縄) 連携・採用活動(A*STARでの科学会合出席) 科学会合出席及び採用活動(ケンブリッジ大学) 出張の起点(居所)への帰路(連携・採用活動(ソーク研究所))	・居所(サンディエゴ)を起点とする出張であり、日本への直行便のあるロサンゼルスから世界一周航空券を利用。
5	航空券 E (¥1,302,598)	H19/4/2 H19/4/2 H19/8/9 H19/10/26 H20/1/9 H20/1/9	サンディエゴ フアンフスコ 関西 シンガポール ロンドン ワシントン ワシントン	フアンフスコ 関西 シンガポール ロンドン ワシントン サンディエゴ	経由地 内閣府訪問等(東京)、機構の内部事務(沖縄)等 連携・採用活動(A*STARでの講義) 科学会合出席及び採用活動(ケンブリッジ大学) 連携・採用活動(ジェネリクス研究所) 出張の起点(居所)への帰路(連携・採用活動(ソーク研究所))	・居所(サンディエゴ)を起点とする出張であり、同地から世界一周航空券を利用。
6	航空券 F (¥1,474,595)	H19/7/4 H19/7/7 —	ワシントン フランクフルト —	フランクフルト 成田 —	経由地(連携・採用活動(フィリッピンの国際会議出席)) 機構運営委員会(沖縄) —	・滞在地(ワシントン)を起点とする出張(ワシントンでの当該滞在については、機構の用務によるものではなく、同地までの移動は旅費の支払い対象ではなかった)であり、同地から世界一周航空券を利用。 ・フランクフルトとフィリッピンは別途、個人負担により往復(当該往復は機構の用務によるものであり、旅費の支払い対象であったが、精算請求書の提出が無かったため個人負担となったもの。なお、当該往復に世界一周航空券は利用できない。) ・成田→ワシントンは、出張予定の変更により使用せず。使用期間は満了している。 ※ 結果的には、使用区間のみを個別に購入した場合の経費(試算額)よりも割安であった。 購入費: ¥1,474,595、試算額: ¥2,386,676 (内訳) ワシントン→フランクフルト ¥1,269,786 フランクフルト→成田 ¥1,116,890
7	航空券 G (¥1,483,787)	H19/7/27 H19/7/28 H20/6/17 H20/6/24 H20/7/10	サンディエゴ フアンフスコ 関西 シンガポール ロンドン	フアンフスコ 関西 シンガポール ロンドン サンディエゴ	経由地 機構の内部事務(沖縄) 連携・採用活動(A*STAR) 科学会合出席及び採用活動(ケンブリッジ大学) 出張の起点(居所)への帰路(連携・採用活動(ソーク研究所))	・居所(サンディエゴ)を起点とする出張であり、同地から世界一周航空券を利用。
8	航空券 H (¥1,387,217)	H19/9/4 H20/7/16 H20/7/23 H20/7/26	成田 ワシントン ロンドン シンガポール	ワシントン ロンドン シンガポール 成田	連携・採用活動(ジェネリクス研究所) 科学会合出席及び採用活動(ケンブリッジ大学) 連携・採用活動(A*STARでの講義) 機構の内部会議、運営委員会(沖縄、東京)	・機構の用務による滞在地(日本(沖縄等))を起点とする出張であり、成田から世界一周航空券を利用。

(注)

- 理事長の移動には、表中の世界一周航空券によるものの他に、機構の用務に伴う出張であって機構が購入費を支出した往復又は片道航空券によるもの及び個人負担等による移動がある。
- 機構の役職員の出張については、国家公務員等の旅費に関する法律(旅費法)の規定に準じ、原則として「在勤事務所を離れて旅行すること」をいう。理事長の場合、勤務形態としては常勤であるが、高度に国際的な活動が必要となる職務の性質上、日常的に世界各地を移動する必要があることから、あらかじめ在勤事務所を一箇所に定めることは現実的ではない。このため、理事長の出張については、運用上、旅費法第2条における「常時勤務する在勤官署のない職員」に準じて、居所(所有住宅のある英国ロンドン及び米国サンディエゴ)を離れて旅行することを出張として扱っている。また、旅費の計算に当たっては、理事長に限らず、私事による滞在地から用務地に至る旅行を行う場合にも、国家公務員に適用される旅費法第10条の規定に準じて、必要な調整を行った上で旅費を支給することとしている。このような運用方針の下、表中の世界一周航空券の利用の起点については、以下の通りである。
 - 航空券 A、B、D、E、G: 理事長の居所であるサンディエゴを出発箇所とした旅行に旅費を支給したものの。
 - 航空券 C、H: 機構の用務により滞在していた日本から他の用務地に直接向かった旅行に旅費を支給したものの。
 - 航空券 F: 滞在地であった米国ワシントンより用務地に直接向かった旅行に旅費を支給したものの(サンディエゴに比べ最初の目的地までの距離が短いため、旅費に支給に当たり、旅費法第10条に準じた調整の必要は生じなかった)。

3. 利用日について区間毎に見ると、1 通の世界一周航空券が全て使用した後に次の世界一周航空券の使用が始まるのではなく、一時期に複数の航空券が併用されている。これは、世界一周航空券の利用ルールにより、大陸間での移動は東西いずれかの方向に限定されることや、当初設定した順序以外で用いることはできない（例えば、日本①-シンガポール②-欧州③-米国の経路を設定した場合、③の使用後に②を使用することはできない）等の制約があることから、当初より、航空券 A から H の順に使い切ることが想定されておらず、また、途中で出張予定に変更があった場合にも、有効期間が残っている航空券の中から、順次有効活用を図ったためである。

4. 用務地と機構業務との関連性は以下の通りである。

① シンガポール科学技術研究庁 (A*STAR) :

シンガポール科学技術研究庁 (A*STAR) は、シンガポールにおける科学技術の中心的な機関である。同庁に置かれている生物医学研究評議会 (BMRC) の傘下には、バイオ情報研究所、バイオ工学・ナノテクノロジー研究所、バイオ処理技術研究所、遺伝子研究所、分子・細胞生物学研究所の 5 つの研究所が属しており、これらの研究所における研究内容は、機構において実施している先行的研究事業との関連性が強い。プレナー理事長は、同庁長官 (Chairman) の科学顧問 (Science Advisor to Chairman) を委嘱されていることから、同庁を拠点として、シンガポールや各国の研究者等との面会を通じて、機構とシンガポールの研究機関等との共同研究の協議、機構の広報、研究者の採用等の活動を実施している。

② ケンブリッジ大学 (英国) :

同大学は、世界を代表する名門大学として、ノーベル賞受賞者は 80 人以上を輩出、世界の大学・研究機関で最多を誇っている。世界で最も有名な大学の 1 つということもあり、世界各地からの学生のみならず、優秀な研究者の交流も大変に盛んである。プレナー理事長は、同大学において頻繁に開かれている科学会合や研究者レベルの交流会に参加し、そうした機会を利用して代表研究者 (PI) 候補の発掘、リクルート活動を行い、併せて機構の広報活動を実施している。

③ ソーク研究所 (米国) :

同研究所は、1963 年に創設された生物医学系の研究機関で、カリフォルニア州ラホラ (La Jolla) に位置する私立の非営利法人である。研究者の数は 1,000 人にも満たない規模であるが、研究論文の引用度は世界でも 1, 2 を争うとされ、教授陣は各研究分野の先端を走っていると言われている。プレナー理事長は、同研究所の名誉職である Distinguished Research Professor の肩書きを与えられており、同研究所を拠点として、機構の研究活動分野と関係のある研究者との共同研究に関する協議を多方面で行っており、併せて機構の PR、並びに PI 候補の発掘、リクルート活動を実施している。

④ ジェネリア・ファーム研究所 (米国) :

同研究所は、ハワード・ヒューズ医学研究所の傘下にある研究所としてワシントン D.C. に位置し、生物学、物理学、化学、コンピュータサイエンス、工学などの様々な分野の研究者が集まり、基礎生物医学研究の根本的な課題に取り組んでいる。プレナー理事長は、本研究所のシニア・フェローの立場を利用して、機構の研究分野と関係のある研究者との共同研究に関する協議を行いつつ、併せて機構の PR、並びに PI 候補の発掘、リクルート活動をしている。

⑤ フィレンツェ癌研究所 (イタリア) :

同研究所において開催された国際科学会合での講義とともに、参加研究者等との交流を通じて PI 候補の発掘、リクルート活動を行ったものである。